

ビ 医療・健康

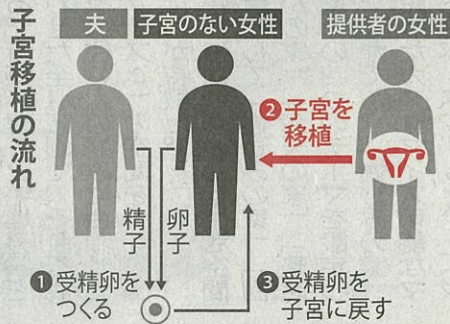
子宮移植

女性から卵子を採取し、体外受精させて凍結保存した後、第三者から提供を受けた子宮を女性に移植する。成功すれば、受精卵を子宮に戻す。子宮のない人が子を持つには、自分の卵子を体外受精して第三者の女性に妊娠・出産してもらう「代理出産」があるが、日産婦は禁じている。

子宮移植 影響解明に課題

妊婦への免疫抑制剤投与 現状は禁止

昨年、スウェーデンで世界初の子宮移植による出産が報告され、日本でも学会などで議論が始まった。子宮移植は妊娠・出産が目的であり、生命維持のために選択される臓器移植とは異なるほか、生まれてくる子への影響や安全性が解明されていないなど課題も多い。



●世界初、出産報告も

先月26日、日本生殖医学会と国際学会による合同講演会が横浜市で開かれ、世界初となる子宮移植による出産を発表したスウェーデン・イエーテボリ大のマツ・ブランストローム教授が登壇した。ブランストローム教授は、生まれつき子宮がない女性ら9人(27〜38歳)に子宮移植を実施。そのうち2人は感染などによって子宮を摘出したが、7人は移植に成功したと報告した。提供者は母親が多く、姉妹や知人女性という例もあった。移植後、5人の女性で拒絶反応があり、最初の出産にいたった女性も妊娠中に軽度の拒絶反応が出たが、免疫抑制剤で治まったという。ブランストローム教授は「これまでに3人が出産し、生まれた子も健康だ。他に

●日本、09年から研究

1人が妊娠中」と語った。また、米国や英国、豪州、中国などでも臨床研究が検討されていることに触れ、患者や生まれた子の情報を登録する国際的な制度の必要性を訴えた。日本では、慶応大、京都大などのチームが2009年から子宮移植の研究を始め、サルなどの動物実験をしてきた。同チームは昨年、ヒトでの研究に向けた独自の指針も作成。臓器移植法では、脳死を含めた死者からの子宮の提供を認めていないため、スウェーデンと同様に生体からの提供を目指している。講演会には、国内チームの医師や移植医療の専門家、不妊治療の当事者らが参加。国内の研究の現状や、病気などで子宮がなく、子宮移植を希望する人たちの心情なども紹介された。そ

子宮移植を巡る国内外の状況

- 2000年 サウジアラビアで26歳の女性に世界初の生体移植。その後、子宮が壊死(えし)して摘出。
- 11年 トルコで21歳の女性に死亡した人から移植。13年に妊娠するが流産。
- 12~13年 スウェーデンのチームが母親らを提供者とする生体移植を9人に実施、14年10月に世界初の出産を報告。
- 14年 日本で産婦人科、生殖補助医療などの専門家が集まる「日本子宮移植研究会」が発足。臨床研究を目指す慶応大などのチームが実施に向けた指針を作成。
- 15年 2月に日産婦が子宮移植の進め方について検討する小委員会設置を決定。

の中で、日本移植学会の湯沢賢治理事は「生体移植は健康な人にメスを入れる。基本的に亡くなった人からの提供であるべきだ」と強調し、「子宮移植も臓器移植法を無視して実施することはできない。時間がかかるが、子宮も認められるように働きかけることが必要になる」と述べた。拒絶反応を抑えるため移植後に使う免疫抑制剤は、現状では妊婦に投与してはならない「禁忌」となっている。使用した場合の胎児への影響は検証されていない。日本産科婦人科学会(日産婦)は今年、子宮移植の進め方などに関する小委員会を設置したが、湯沢理事は「子宮移植で生まれる子についての知見がないことが最重要課題だ」と注文を付けた。国内で臨床研究の実施を目指すチームの木須伊織・慶応大助教は「関係する学会の意見を聞きながら進めたい」と話している。【下桐実雅子】

MEMO

アレルギーに正しい知識を

28日、学会が市民講座開催

日本アレルギー学会は第64回学術大会の一環として、28日午後3時35分から、グランドプリンスホテル新高輪(東京都港区高輪3)の国際館パミールで、「アレルギー診療のウソとホント」をテーマにした市民

公開講座を開く。

「食物アレルギーに正しく対応するには？」と題して、あいち小児保健医療総合センターアレルギー科の伊藤浩明医師が講演。科学的な根拠のない「食物アレルギービジネス」に惑わされないための正しい知識を説明する。また、相模原病院小児科の柳田紀之医師が、短時間で呼吸困難など重

いアレルギー症状を引き起こす「アナフィラキシー」への対応について、埼玉医科大学病院耳鼻咽喉科の上條篤医師が、免疫療法など「アレルギーを治すには？」について、それぞれ解説する。

定員は先着200人。参加無料。事前申し込みは不要。問い合わせは、運営事務局(サンプラネット)03・5940・2614へ。